筆山

第49号／2010年12月

土佐中・高等学校同窓会 関東支部会報　　編集人/西岡 恒憲（41回）

編集室：〒106-0032 港区六本木3-16-12-7F 六本木司法書士合同事務所気付 編集委員 鶴和千秋（41回）
TEL 03-3587-6200 FAX 03-3587-6201 E-mail:tsuruwa-office@rsg.gr.jp
関東支部ホームページ：http://www.tosako-kanto.org/

２０１０年８月２１日　銀座１丁目に高知県のアンテナショップ「まるごと高知」がオープンしました。

出会い直す

笠井賢一（42回生）

高知を離れて四十四年になる。還暦も過ぎるとなにかと故里で仕事をしたいと思うことも多くなる。五年前、高知新聞に三ヶ月ほど「芸能の力 ― 言霊の芸能史」を連載した。それも中世までで止まっており、近世から現在までを書き継がなければならないと思っている。私の能・狂言のプロデュースの仕事と演出の仕事は、なかなか高知で実現することは難しい。免疫学者の多田富雄氏の新作能「花供養 ― 白洲正子の能」や作家石牟礼道子さんの新作能「不知火」などの演出を手がけており、それを高知の能楽堂で上演することが出来たらとも思うが、能の公演は全員を東京から呼ぶので、予算が折り合わないであろう。

さて私が深く関っている古典芸能の世界では、その年齢を重ねるごとに作品との新たな出会いがあり、新たな発見があるものだ。それが古典の価値だ。つまりは出会い直しである。日本中が坂本龍馬や岩崎弥太郎や山内容堂と出会い直している。山内容堂は喜多流の能の保護者として大きな功績のあった恩人である。その容堂を、強烈に演じている近藤正臣氏と五年ぶりに仕事をする。

『平家物語』の平維盛の都落ちから、滝口入道に戒を授けられ、那智の沖で入水して果てるまでの物語を、原文のまま語ってもらう。島田正吾さんの七回忌追悼公演『平家物語の夕べ』として再演する。初めて仕事をしたときの新鮮さから、歳月を経て此の度どんな表現をされるのか、創りあげられるのか、今から楽しみである。役者も、演出家も作品と出会い直すのだ。六十歳のなかば過ぎて、二十七、八歳で入水する悲劇の若き貴公子を演じる。若さの渦中に居ては若さの真実は掴めない。若さを失ったとき初めて若さのもつ時間の特権性も、愚かしさも、ひたむきさも見えてくる。これが古典と出会い直すことの本質なのだ。（演出家・能楽プロデューサー）

関東支部　学生・若手社会人交流会　in　2010

長谷　至誠（76回生）

去る11月6日(土)、東大駒場キャンパスに総勢97名の土佐校卒業生が集い、『学生・若手社会人交流会 in 2010』が開催された。関東在住の若い卒業生に向けて、先輩方からメッセージをいただき、その名の通り土佐校のネットワークを広げようという趣旨のもと、第一回の尾崎正直高知県知事（61回）、第二回の森郁夫富士重工業㈱代表取締役社長（41回）に続き、今回基調講演を行って下さったのは、秦郷次郎さん(31回)。

秦さんは、大学卒業後の1959年に渡米されMBAを取得。NYの会計コンサルタント会社を経て、1978年のルイ ヴィトン・ジャパン㈱創業時に代表取締役に就任され、その後LVJグループ、LVMHグループと変遷をたどる中で最高経営責任者を歴任し、現在は秦ブランドコンサルティング㈱の代表取締役社長を務められている。そんな国際経験が豊富な秦さんには、ご自身の日本「脱藩」に至った経緯と、その後の社会経験について話していただいた。

土佐校在学中の教師のおかげで英語が好きになり「海外に行きたい」という夢を抱いた秦さんは、慶大卒業後、当時ではまだ珍しかった海外留学を果たす。アメリカでの努力が実を結び、NYの会計コンサル会社で勤務する中、ルイ ヴィトンとの接点ができた。ルイ ヴィトン・ジャパンを創業してからは、ブランドが日本国内の取引先を直接管理し、為替に応じて商品価格を変動させるという新たなビジネスモデルを取り入れ、日本だけでなくアジアにおけるルイ ヴィトンブランドの確立に貢献。そんな秦さんから頂いたメッセージは、「自分自身でラッキーと思うだけでなく、周囲からもラッキーと思われる人間になれ」。それは、「単なる運ではなく、忍耐力と判断力が兼ね備わっていなければそういう人間にはなれないから」。

続いて、秦さんに濱田知佐さん（56回）と上田真路さん（76回）を加え、市原正人さん（71回）の司会により「土佐と土佐『人』のブランド戦略はどうあるべきか」をテーマにパネルディスカッションを行った。濱田さんは、国際線CA時代にワインに魅せられ、ソムリエの資格を取得し、その後世界NO・1ソムリエである田崎真也氏のワインサロン立上げ・経営を担い、現在は今年8月に銀座にオープンした県のアンテナショップ『まるごと高知』にて、高知食材の魅力を発信しているレストラン『おきゃく』のGMとして店舗経営および高知県のブランドイメージ確立のために奮闘中。

上田さんは建築家の叔父の影響で自身も建築の道を進み、大学在学中に自らデザイン事務所を立上げた。「人間の生活に関わる全てをデザインする」をモットーに、現在は鹿島建設にて海外都市計画に携わる傍ら、週末は自らのアトリエにてジュエリーや家具のデザインに没頭している。

そんな3人に共通していたのは、「好きなことを極めたい」という飽くなき探求心を持ち、それが行動の原点になっていることだ。英語好きの秦さん、ワイン好きの濱田さん、そして建築好きの上田さん、それぞれ対象は異なるものの、その探求心が新たな出会いを生み、方向性を定め、彼らのこれまでの人生を創ってきた。秦さんは『ブランドの真髄はHonesty & Truth（正直さ＆正しさ）』だと言っていたが、彼らは自身の探求心に対して正直に、そして正しく行動した結果、自分というブランドを確立したのだと感じる。

また、JTBにて営業を担当しており世界の観光都市に詳しい司会の市原さんから故郷・高知県に対する提言を求められ、「ワインのように、地名＝ブランドとなるよう農作物に原産地保証を取り入れられないか（濱田さん）」、「世界唯一の、間伐材のアーケードを延長し、帯屋町と高知駅の一体感を高める（上田さん）」。その昔、地方都市進出のモデルケースとしてルイ ヴィトンの独立店舗を追手筋に出店した秦さんからは、東京に住む卒業生に出来ることは「まず『おきゃく』に足を運び（笑）、高知の良さをアピールして広めること」との話があった。

その後の懇親会では、いたる所でビール片手に世代を超えた活発な談義が繰り広げられていた。参加者の共通点は、土佐校の卒業生であること。それだけで生まれる一体感に、手前味噌だが、土佐校ブランドを感じることが出来た。これを機会に、学生・若手社会人ともに、土佐校ネットワークをどんどん広げていって欲しい。そして、それが土佐校や高知県のブランディングのさらなる発展につながっていくことを願っている。

関東支部活動報告

事務局長　二宮　潔（49回生）

先号（筆山48号）で、今年度の関東支部役員の新旧交代をお知らせ致しましたが、改めて全役員の一覧を左に掲出いたします。

支部長　泉谷良彦（29回）
幹事長　市川直介（53回）
事務局長　二宮　潔（49回）
副幹事長　佐々木泰子（33回）
同　中村裕子（37回）
同　山渕玲子（63回）
同　町田憲昭（67回）
同　小松岳志（70回）
同　澤田千紘（78回）
会計監査　幸徳正夫（37回）
同　森木隆裕（59回）
会計　川上正衡（58回）
常任幹事
名簿委員長　川上　司（52回）
筆山編集長　西岡恒憲（41回）
HP編集長　筒井康賢（41回）
総会世話役　西森さと（57回）
顧問　曽和純一（16回）
同　宮地貫一（21回）
同　山本高敬（25回）
同　浅井伴泰（30回）
同　溝渕真清（32回）
同　大石和男（40回）
同　岩村康生（41回）
同　鶴和千秋（41回）

その他の支部行事に関しては「本部・各支部総会への参加（半年間の公式行事）」「表参道ガーナよさこい」、「学生・若手社会人交流会」については別項でそれぞれのご報告を頂くこととし、今回の支部活動報告は噂の『おきゃく』のご案内と大宣伝に替えさせていただきます。

猛暑の真っ只中、お江戸の銀座に去る8月21日、賑々しくオープンした高知県アンテナショップ『まるごと高知』（地下鉄「銀座1丁目」出口前）。地下1階は地酒盛り沢山の『とさ蔵』、1階はカツオ節、天ぷら、スマキにジャコ、リュウキュウ、オクラなど高知名物なんでもござれの『とさ市』、そして2階では自慢の土佐料理を基本に和洋折衷の洒落たレストラン『おきゃく』がお出迎え。テレビ各局によるニュース放映も功を奏し、しばらくはお隣の沖縄県アンテナショップ（銀座わしたショップ）をさし置き、『おきゃく』は1、2時間待ちは当たり前！という大盛況ぶりだったとか・・・。

やや落ち着いた9月24日、女将の濱田知佐さん（56回）への激励と取材も兼ねて、我らが「筆山編集会議」を挙行。なにせ毎回、熱の入った取材企画を議論し合う編集会議ですので、今回は個室を予約しました。ところが記録的猛暑の最中、オープン前後から一日の休みも無く大奮闘した「女将」（飲食部門ジェネラルマネージャー）は、前日から高熱を出してとうとうダウン。当日は、ピンチヒッターの岩田マネージャー、別嬪の上原麗さん（78回）に、こじゃんとお世話になりました。

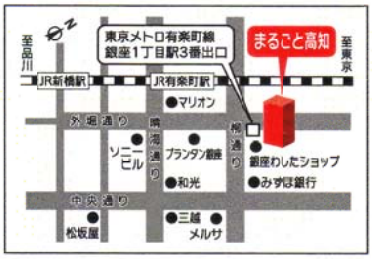
流石に新店舗、床の杉材の香りにダイニング中央でカツオのたたきを焼く演出にと、清潔感も漂う店内の雰囲気づくりも上々です。さて、肝心のお酒と料理の評価ですが、お酒は土佐の酒造名家18社による自慢の地酒に、ワインソムリエ日本一になったことがある女将ならではの選りすぐり各国ワインがズラリと紹介されちょりました。飛び切り美味いイタリア産・白ワイン（ソアヴェ）のボトルを4人で品格よろしく3本ほど空けて、みんな大満足の編集会議と相成りました。

ちなみに食いしん坊の編集委員の選んだベスト5は①清水さばの刺身、②手長えびの唐揚げ、③カツオの塩たたき、④はちきん鶏の唐揚げ、⑤フォンデュ風・生野菜盛合わせの5品です。

特に女性の集客を意識したお店だそうですが、この夜も土佐ダイニング「おきゃく」では土佐弁丸出しの大声を張り上げる「いごっそう」（？回生）をお見かけしました。

まだ行かれてない皆さんもぜひご予約のうえ、お出掛けください。年中無休で、昼はランチもやりよりますきに。

おきゃく
TOSA DINING
一般財団法人
高知県地産外商公社
ジェネラルマネージャー
濱田知佐
（56回生）



www.marugotokochi.com/
Tel 03-3538-4351（サンゴ・皿鉢・ヨサコイ）
〒104-0061 東京都中央区銀座1－3－13

母校だより

学校長　池上武雄（28回生）

皆様にはますますご健勝のこととお慶び申しあげます。いつも母校に対し格別のご支援をいただいておりますこと心から感謝申しあげます。

○創立90周年記念行事ほか

昨年11月18日、新校舎竣工記念行事を盛大に行ないましたのに続いて、本年は創立90周年に当たりますので、同じ11月18日創立記念日に記念行事の開催を予定しております。内容は、記念式典（永年勤続者表彰を含む）と記念講演です。講師は、加賀野井秀一先生（中央大教授、フランス哲学、44回生）と須藤靖先生（東大教授、宇宙物理学、52回生）のお二人方にお願いしております。

また、引き続いて、同日午後2時から同窓会・振興会主催による第3回特別講演会が筆山ホールで開催されます。講師は尾池和夫先生（国際高等研究所所長、地球物理学、34回生）です。この講演会にはご近隣の皆様もご案内しております。

○「津波避難ビル」指定

9月10日、高知市、本校、潮江小校区連絡協議会の三者で、津波避難ビル協定を結び

ました。高知市は、南海地震の津波対策として避難ビル指定を進めており、本校体育館２階のアリーナ部分（地面からの高さ約６ｍ）と男女トイレを使用、収容人員は約１７００人です。このことは翌日の新聞紙上でも紹介され、宮地理事長の「昨秋の校舎改築で耐震構造の体育館が完成、地域住民がすみやかに逃げられるよう今後防災計画を詰めていきたい」、また地域住民の代表からは、「住民の間に災害時の逃げ場所に不安があったので心強い、学校と地域がコミュニケーションを取り合える場所になれば」との期待の談話が掲載されました。

○新校舎建築募金の現況

同窓会の皆様のご協力に心より感謝申しあげております。平成22年９月30日現在、件数は４８９６件、金額は、２９６、６４２千円となりました。今後地元金融機関ならびに企業グループからのご協力が近々期待できますので、目標額４億円を目指して頑張りますので引き続きよろしくお願い申しあげます。

○野球部、秋の四国大会出場

高知県予選で久し振りに高知商業を破り県第３位代表として秋季四国大会（高松レクザムスタジアム）に臨みました。10月23日、香川県第２代表香川西高と対戦、残念ながら９対０（７回コールドゲーム）と大敗いたしました。捲土重来を期し、部員一同の一層の奮起を期待しておるところです。関東はじめ各地から先輩の方々が応援に駆け付けてくださいました。有難うございました。

○高一生の修学旅行でお世話になります

例年通り11月23日から27日まで高一生の修学旅行が実施されます。関東一円でのコース別研修に備えて、各グループ別に熱心な事前勉強が行なわれております。（東京証券取引所からは、わざわざ本校まで出向して下さり、業務内容のガイダンスを受けました）

生徒達も大変期待をしております。訪問を予定しております先の同窓生の皆様にはいつも格別のお世話様になっておりますが、どうか宜しくお願い申しあげます。

最後に皆々様のますますのご健勝、ご活躍を祈念申しあげ、近況のご報告といたします。（平成22年10月末日）

本部だより

副幹事長　田所智子（49回生）

関東支部のみなさん、はじめまして。昨年８月の総会で副幹事長を仰せつかりました田所智子と申します。微力ではありますが、お役にたてるよう努めてまいる所存でございます。何卒よろしくお願いいたします。

今年の夏は、「たまあるか、暑いねえ。」「いつになったら、涼しゅうなるろうねえ。」などが挨拶代わりに交わされるような酷暑でしたが、急に寒くなり、今年の冬は一転、厳しい寒さが待っているように思います。

さて、この一年、母校創立90周年ということもあり、７月の筆山で副会長の徳永さんが紹介しておりましたように、本部では同窓会活動活性化のために、様々な取り組みをしております。では、本部の近況をご報告申し上げます。

◇ホームカミングデー２０１０開催

猛暑の８月14日（土）、恒例のホームカミングデーが開催されました。今年は40回生の鍋島康夫実行委員長のもと、末尾がゼロの回生で構成する「ゼロの会」の皆さんの奮闘のおかげさまで、多数の同窓生に参加いただけました。

昼間には学校のご協力を得て、「免震ピット見学会」、小村教頭先生（49回生）による「特別授業」、「総会」、岡村甫高知工科大学理事長（32回生）の「研究と野球」と題した「第２回筆山ホール講演会」を、夜には場所を高知新阪急ホテルに移して、大懇親会が開催されました。５年目を迎えた「よさこいチーム陽」の踊りで幕を開けたこの懇親会には、今年卒業の85回生をはじめ、若い世代の参加者も多く、２００余名の同窓生が旧交を温めました。最近とみに、実行委員はもとより参加する同窓生の中に、若い方が増えていることは大変喜ばしいことです。

◇第３回筆山ホール講演会

11月18日（木）には、「変動帯に生きる」と題して尾池和夫国際高等研究所長・前京都大学総長（34回生）の講演が開催されました。本校が津波の緊急避難先として市と近隣４町と津波避難ビル協定を締結したこともあり、今回初の試みとして、近隣住民の皆さまや市・県の防災関係の方、一般の皆様にもご案内いたしました。

◇２０１０同窓会名簿発行

名簿調査にご協力有難うございました。もう、皆様のお手元には２０１０同窓会名簿が届いておりますでしょうか？前回に引き続き、ご予約いただいた方のみに送付させていただきました。まだお申し込みでない方は、学校・千頭さんまでご連絡ください。

（０８８-８３３-４３９４）

５月初旬、１５０００通余りの調査カードの発送作業から始まり、６月からは返送されてくる調査カード（含メール）の入力作業が連日続きました。当初は８月末を調査の締切としていましたが、少しでも精度を高めたい一心で、10月半ばのギリギリまで名簿情報収集に努め、名簿に反映いたしました。それでも60～80回生代に空白が目立ち、残念な感が残りました。

ただ、嬉しいことに、この経済情勢の悪いなか、広告協賛を多くの同窓生がしてくださり、目標額を達成できましたことを、名簿委員の一員として、大変感謝いたしております。この紙面をお借りして、厚くお礼申し上げます。本当に有難うございました。また、今回の表紙は入交京子さん（36回生）の素晴らしい立体

名簿表紙の写真は、入交京子さん（36回）の作品「幸福交叉」

作品で飾っていただきましたことを申し添えます。

私たち本部は、これでやれやれではなく、5年後の名簿発行に向けて、今から会員情報の収集に努めてまいります。住所、勤務先等変更、最終学歴（在籍校）未登録の方等、会員情報の変更・登録は、関東支部のホームページ【http://www.tosako-kanto.org/】右上の「会員情報変更」から、是非お願いいたします。直接本部に届くようになっております。名簿で宛先不明になっている方（氏名の前に＊）をご存じでしたら、ホームページから登録していただくようお伝えくださいませ。

最後になりましたが、関東支部の皆様のご健勝をお祈りいたします。素敵なクリスマス、よいお年をお迎えください。

北海道支部だより

支部長　和田健夫（44回生）

関東支部の皆様こんにちは。全国的に寒い日が続いておりますがお変わりありませんか。北海道は、10月26日に初雪が降り、5～10センチほど積もりました。

今夏は30年に一度の異常気象だったとやら。北海道も同様で、新聞記事によりますと、8月の平均気温は観測史上最高を記録し、平年値よりも2・8度高かったそうです。とにかく暑い夏でした。

そのために、北海道の農業は相当の影響を受けました。北海道経済は、少し持ち直しておりますが、道は遠く、観光客の伸びも今ひとつ。北海道日本ハムファイターズは日本シリーズ出場が叶わず（ダルビッシュが残留したこと、ドラフト会議で東京六大学NO1投手を引き当てたのが明るい材料です）、札幌コンサドーレのJ1復活はいつのことやら。

そのなかで、鈴木章北海道大学名誉教授のノーベル化学賞受賞は北海道民に希望と活力を与えました。北海道支部の方々はじめ、北海道大学出身の全国OB・OGの皆様に、心よりお祝い申し上げます。

最近種々のランキングが流行していますが、民間の調査機関が毎年行っている全国都道府県、市町村の魅力度（住んでみたい）ランキングでは、今年も北海道は1位、市区町村別でもベストテンに北海道の4市（札幌1位、函館2位、小樽5位、富良野8位）が選ばれました。坂本龍馬が生前あこがれ、彼の意思を嗣いで子孫が移り住んだ北海道に是非おいでください。

近況をお知らせします。10月30日に支部総会と懇親会を開催いたしました。総会において役員の改選が行われ、次の方々が選ばれました。

支部長　和田健夫（44回）
幹事長（広報）
　先川信一郎（45回）
事務局長　山本隆昭（53回）
幹事　田原哲士（37回）
同　武田　光（38回）
同　山内千佳（53回）
同　石川多香（68回）

懇親会には、母校から小村彰教頭先生（49回）、本部会長の岡内紀雄氏（34回）、関西支部から太田涼子氏（29回）をお迎えし、北海道支部からは、田原哲士、先川信一郎、山本隆昭、山内千佳、島村智砂子（53回）、仁井田優作（82回、新人）の各氏と私が出席しました（写真をごらんください）。なごやかな雰囲気のなかで交流を深めることができました。母校の近況、新校舎の建設、募金活動の様子などを伺いました。創立100周年に向けて順調に事業が進んでいるようで、支部メンバー一同大変心強く感じています。

皆様の益々のご健勝をお祈りしております。

東海支部だより

幹事　瀬沼憲司（64回生）

関東支部のみなさま、こんにちは。東海支部で幹事をしております64回生の瀬沼です。東海地方も景気の方はなかなかすっきり上を向いてくれないようですが、スポーツの方で非常に元気にしてくれています。野球では中日ドラゴンズがセリーグ優勝をし、サッカーでは、Jリーグで名古屋グランパスが好調です。

東海支部で毎月開催している二水会（第二水曜日に有志で集まって飲んでいます）でもスポーツの話題が多く出ます。

東海支部の瀬沼というと名古屋グランパスであり、サッカーワールドカップです。今年南アフリカで行われたワールドカップにも行って参りました。これまでフランス大会から3大会連続で現地でワールドカップを体感してきました。日韓大会・ドイツ大会では息子も連れて行っています。

今回は時間的な制約（片道20時間以上）と、よくいわれる治安の不安もあり、さすがに悩みました。しかし、やはりどうしても行きたい、4大会連続で日本代表とともに現地でという気持ちが勝り、最大限の安全と最小限の仕事などへの影響を考え、弾丸ツアーにて息子と二人で 行ってきました。現地滞在は1泊のみと現地の雰囲気を楽しむには時間が短すぎる気もしましたが、やはりワールドカップはどこでやっても、サッカーだけではなく世界の人々の集う、すばらしいお祭りでした。心配した治安もしっかりしており、特に危険なこともなく、地元の人たちもとても温かく迎えてくれ、現地・スタジアムの雰囲気もとてもよかったです。日本代表の活躍もあり、今回もすばらしい体験となりました。

また名古屋グランパスもこの原稿を書いている時点で首位にいます。今年はホーム、アウェイともほとんど応援に行っていて、現在までの29試合中26試合の応援に全国へ駆けつけています。残りの5試合もできれば全部行きたいと思っています。関東へ応援に行くことも多いので、関東の皆さんと試合後に一杯ということができたら嬉しいので是非、よろしくお願いいたします。Jリーグは12月初旬までなので、12月11日（土）12時から開催されます東海支部冬期懇親会で名古屋グランパスの優勝の報告ができることを期待しています。

最後になりましたが、関東支部の皆さまのご発展をお祈りいたしまして、東海支部便りとさせていただきます。

関西支部だより

幹事　福島充也（69回生）

関東支部の皆様こんにちは。前回に続いての執筆となります、関西支部幹事の福島でございます。

今回ご紹介するのは、知る人ぞ知る大阪の新しい観光ツアー「大阪ダックツアー」です。皆様が大阪に来られて主な観光スポットを巡るのなら「観光バス」か「鉄道」か、それとも「船」にするか・・・。しかし今、最も注目を集めているのは、道路も川もどちらも走りながら、しかも観光までできてしまう、こんな夢のようなツアー、これが「大阪ダックツアー」なのです。

この大阪ダックツアーに使用されている車両は、もともと軍事用に作られていた水陸両用車を一億円近くかけて観光用に改造した「水陸両用バス」で、日本にたった3台しかありません。このバスは自動車として一般道路、高速道路を走行できるだけでなく、車両後部のスクリューを出して船舶として水上走行もできる乗り物です。2007年に水陸両用車として日本で初めて営業許可を取得して、大阪ダックツアーがスタートしました。

車は40人乗り。ツアーは、天満橋近くの川の駅「はちけんや」からスタート。大阪城や大阪ビジネスパークの高層ビル群を横目に眺めながら、桜ノ宮公園の近くで大川に入水、「スプラッシュイン」。そして川からのクルージングを中之島手前まで楽しんだ後、再び陸に上がって御堂筋を南下。イチョウ並木や心斎橋、道頓堀のすぐそばも通って、再び川の駅「はちけんや」に戻って来ます。所要時間は陸上70分、水上30分の合計100分ほどのツアーです。

大阪の主要な観光スポットをほぼ網羅できるだけでなく、「水の都」といわれる大阪を川から眺めるのはまた格別で、陸から川からどちらも一度に楽しめてまさに一石二鳥であり、新しい大阪の人気観光ツアーになりつつあります。休日などは予約ですぐ埋まる人気ぶりで、最近は親子連れだけでなくアジアや欧米からの外国人の利用も多いようです。ちなみに料金はオンシーズン（3月20日～10月31日）の場合、大人3600円、小学生以下2300円、2歳以下800円で、1日5便が運航されています。

さて、来年度の関西支部総会ですが平成23年4月3日（日）13時～15時半に開催されます。前回は夕刻にテラスで夜桜を眺めながら・・・の企画でしたが、時期的に寒すぎてテラスに出られなかったという反省も踏まえ、時間をお昼に早めての開催となります。

また今回紹介した「大阪ダックツアー」。前回の総会で実施した水上バス「アクアライナー」の企画に代わり採用されることが、先日の幹事会にて決定いたしました。詳細はまだ打ち合わせ中ですが、総会の前に前回同様桜ノ宮の4千本のお花見ツアーを開催したいと思っておりますので、関東支部の皆様も機会がございましたら是非ともご参加お待ちしております。

最後になりましたが、関東支部様のますますのご発展とご健勝をお祈りして支部だよりとさせていただきます。

広島支部だより

幹事　中野理和子（52回生）

こんにちは、広島支部です。広島支部は、平成22年度より、支部長が沖修一氏（40回）から沖田道子氏（41回）に引き継がれ、現在会員180名で成り立っています。

年一回の総会が、毎年、広島県民文化センターで開催され、今年は10月30日に行われます。総会はまず全員の校歌斉唱で始まり、年度報告のあと、卒業生による講演会が続きます。私は平成17年度から参加していますが、その年は、京都大学総長尾池和夫氏（34回）がやはり土佐高の同級生である奥様葉子氏（旧姓上村）共々来広されました。ご専門である地震について、当時のスマトラ沖地震と絡め詳細なデータと共に分かりやすく講演して頂き、いずれ来る南海地震（必ず来ると言われていました）についても会場から

沢山の質問が出ていたのを覚えています。そのあとも、筒井康賢氏（41回）、宮田賢二氏（33回）、上治堂司氏（48回）、岡上功氏（40回）と毎年様々な分野で活躍されている先輩諸氏による、とても貴重で面白い話が聞ける素晴らしい講演会が続いています。今年は、塩田潮氏（40回）が講師に決まっています。内容は未定ですが、最近の政治情勢について色々な興味深い話が聞けるのではないかと、会員一同楽しみにしています。会場に溢れる土佐弁と、元気一杯の先輩方との交流は、日々お疲れの同郷の皆様にお勧めのカンフル剤です。

各支部共通かもしれませんが、当広島支部も、なかなか若い世代が参加されず、50代の私ですら若者と呼ばれ悦に入る状況です。広島大学には、毎年母校より入学者がいますので、今後は学生達の安定した参加が課題です。役員一同、知恵をしぼって、楽しく元気の出る土佐高らしい集まりを続けていきたいと思います。

猛暑のあと、今年の秋は短いかもしれませんが、紅葉といえばもみじまんじゅうの広島に、是非皆様遊びにいらして下さい。

（平成22年10月19日）

香川支部だより

事務局　大石　浩（54回生）

関東支部のみなさん、こんにちは。香川支部事務局の大石と申します。

今年の香川支部「七夕総会」は、例年どおり7月第一土曜日の7月3日に、小村教頭先生、岡内同窓会本部会長をはじめ6名の皆さまを来賓としてお迎えし、高松駅前の「シンボルタワー」で開催しました。関東支部からは70回学年幹事の上岡将人さんが遠路参加下さり、支部会員との親交を深めていただきました。また、元香川支部幹事で現在は関東支部所属の北村伸一先輩（45回）も、飛び入りで参加下さいました。ご多忙の中、本当にありがとうございました。今年の総会も、19回の三澤衡一郎大先輩を筆頭に、社会人1年目の78回生まで、例年に比べやや少なめでしたが38名の仲間が集まり、いつもながら先輩・後輩入り乱れての大盛り上がりとなりました。なお、今年度の役員改選では、転勤等による役員の異動もなく、現行体制のまま全員が留任することとなりました。引き続き、安岡支部長以下、支部役員をよろしくお願いいたします。

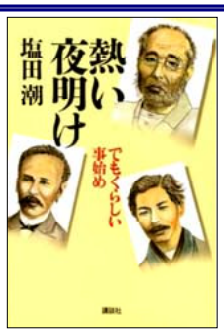
今年は、「龍馬伝」や「坂の上の雲」などドラマブームもあって、たくさんの観光客が四国を訪れました。当地香川では、7月の海の日から10月末まで、「瀬戸内国際芸術祭」が開催されました。小豆島をはじめ直島、豊島など瀬戸内海の7つの島にさまざまな現代アートを配し、各地の歴史や文化に触れながら、瀬戸内の島々を巡ってもらうというイベントです。猛暑が落ち着いた9月後半から観光客がどっと押し寄せ、7つの島と高松港周辺は大変な賑わいで、人気の会場は数時間待ち、フェリーも積み残しのお客さんが出るほどの盛況ぶりでした。新聞報道によると、開催期間中に7つの島を訪れた人は、当初計画の30万人を大きく上回る90数万人とのこと。驚きの集客数は、すばらしい現代アートやイベント等もさることながら、穏やかな瀬戸の海と島々をのんびり船で巡っていくという趣向が、現代人に受けたのかもしれません。

来年の香川支部総会は7月2日（土）を予定しています。飛び入り参加大歓迎ですので、瀬戸内観光もかねて、ぜひ一度高松にもお立寄りください。

最後に、関東支部の皆さまのますますのご健勝とご活躍をお祈りいたします。

新刊案内〈出版レーダー号外〉

塩田潮（40回生）

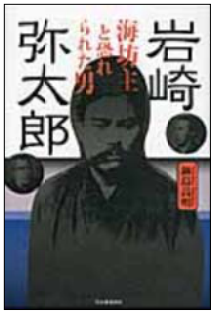


『熱い夜明け―でもくらしい事始め』　1890円
講談社　2010.10

日本の議会制度と憲法の誕生をめぐるドラマで、幕末から明治前半期、土佐出身の中江兆民や馬場辰猪、坂本龍馬、ジョン万次郎らが登場する小説仕立ての歴史ノンフィクションです。物語の中で土佐人が交わす会話をディープな土佐弁で描きました。

（著者より同窓会への紹介PR文）

鍋島高明（30回生）



「岩崎弥太郎―海坊主と恐れられた男―」1890円
河出書房新社　2010.9

岩崎弥太郎の生涯は戦いの連続であった。終生のライバル井上馨・渋沢栄一を向うに回し押しまくった。

著者は、取材のため、岩崎弥太郎生誕の地高知県安芸市には4回出かけ、坂本竜馬と弥太郎の接点が生まれる長崎には5回出かける等、集めた資料の山の中からこの本はできた。「テレビドラマの弥太郎はどこの弥太郎なら？」

第十四回土佐高ハイクの会

ビールと米沢牛と吾妻山

岩橋真理（58回生）

今年のハイクの会から無事帰宅した翌朝、我が家の電話が鳴り響きました。その日は休みを取っていたのですが、一瞬電話に出る事を躊躇してしまいました。なぜなら、めったな事では自宅に電話は掛かってきません。親しい友人も、緊急電話もほとんどが携帯にかかってくるからです。「この電話には出てはいけないような気がする」一抹の不安を覚えながらも恐る恐る出てみると、37回の中村裕子さん。さらにドキドキしながらお話を伺うと、「昨日の帰り際に○○さんが、三つも取ったおまんが書きや言うて、資料も何もかも全部荷物の中に放りこまれたがよ。けんどあたしも忙しいきねえ」

つねに元気溌剌でバイタリティに溢れる中村先輩の声が、心なしか半泣きのように聞こえたのは私の気のせいだったのでしょうか。いや、今にして思えば、これも中村先輩の名演技にまんまとかかった私の修行不足でしょう。そして、20年も先輩の方から直々にお電話を頂いて、お願いされて、尚且つそれをお断りする方法を私は知りませんでした。

そもそもハイクの会に参加させて頂く事になったのも、二年前の関東支部同窓会の総会幹事として中島宏さんを筆頭に38回の先輩方と懇意にさせて頂いたのがきっかけです。ここは8の会の一員として日頃の恩返しもあるし・・・えい、ままよ！とお受けする事にしました。

浄土平集合写真

という経緯で、いつもなら37回か38回の先輩達が書かれるハイクの会の原稿を、58回の若輩者が書かせて頂くことになったのでした。

今年で十四回目となる土佐高ハイクの会は、37回の浜田継夫さんが幹事となり福島県の吾妻山を目指します。

日本列島が猛暑続きの七月二十四日、朝7時30分に新宿に集合した老若男女28名は定刻通りに出発、一路東北へ。今年もお世話になるのは東都観光バスの庄司さんと中沢さんです。夏休みという事もあって、東北自動車道に入るまでは車も多く、どこのPAもごった返しています。

でもそんな渋滞なんて全く関係ないのが38回の諸先輩方です。今年も朝からビール片手に絶好調。中でも特筆すべきは三宅ヨシロウさん。なんと6月に片肺切除の大手術をされたというのに、無事（？）に今回も参加です。相変わらずの毒舌に大声。ただし、さすがに煙草だけはおやめになられたようで、一本七千円の煙まで出る偽物で吸っている振りをされていました。

反して、37回生の先輩方は今年もご夫婦での参加で、皆さん物静かに語らっていらっしゃいます。いつも思うのですが、どうしてこの水と油の様な37回生と38回生の先輩方がとても仲良しなのか、まったくもって解せません。

米沢市内に到着したのはお昼過ぎ。ここからは米沢市内を「おしょうしな（山形弁で「ありがとう」）ガイド」さんに案内してもらう組と、近くにあるワイナリー見学に行く組に分かれます。ワインに目のない私は迷うことなくワイナリーへ行きましたが、試飲のワインでいい気分になってついついワインを二本も購入。その他、米沢牛のビーフジャーキー、サラミなども次々と購入。バスで隣の席に座っていた神宮さん（44回）には「いくらなんでも初日から買い過ぎでしょ」と爆笑されてしまいました。

その後は米沢市内に戻って上杉神社に参拝したのですが、折角来たのだからと米沢牛の焼き肉を食べるべく数人の方が途中下車。でも市内観光組、焼き肉組を待つ間に私もちゃっかり米沢牛の串焼き（千円）をパクリ。あふれる肉汁に一本で充分満足いたしました。

今宵の宿は高湯温泉。白濁の硫黄泉です。渓流沿いの露天風呂にゆったり浸かった後はお決まりの大宴会が始まります。お料理も美味しく、朝のバスからビールを飲みまくっていた諸先輩方はさらにヒートアップして大盛り上がりです。明日は果たして無事に登山ができるのでしょうか？一抹の不安と共に山の夜は更けていったのでした。

登山当日は、前夜のアルコール大量摂取にもかかわらず、5時前には渓流とヒグラシの鳴き声でさわやかに目覚めました。朝食代わりにお弁当を用意して頂きバスで旅館を出発です。

まるでつづら折りの様な磐梯吾妻スカイラインを通って、磐梯朝日国立公園内の浄土平ビジターセ

ンターへと向かいます。今回の目的地である一切経山（いっさいきょうざん）の名前には、さるお坊様が一切噴火をしない様にお経を山頂に埋めたなど種々な言い伝えがあるようですが、なにせ出てくる地名が「浄土平」に「三途の川」ですから、その地名だけでバスのなかでは自虐ネタで大盛り上がりです。私も窓の外の絶景を眺めながら「もしバスが転落したら・・・」などと一瞬ですが考えてしまいました。

全員で記念撮影後、8時30分にスタートです。ここから登山組は一切経山の山頂へ、散策組は吾妻小富士の火口壁を回るコースへと別れます。

お天気に恵まれ、暑さも気にならなかったので楽に登れるかと思ったのもつかの間、浄土平から酸ヶ平まではかなり急斜面の為にすぐに太ももがパンパンに。人より血の気は多くても、血液中のヘモグロビンが少ない私は貧血でふらふらです。さらに酸ヶ平からはひたすら荒涼とした険しい岩場の道を進みます。ビジターセンターから約2時間弱。周りを遮るものが無い為、360度見渡せる頂上から眺める五色沼は、冴え冴えと青く光り輝いていました。

後方組の到着を待って頂上での記念撮影を終えると、雲行きが怪しくなってきたために急ぎ下山します。帰りは酸ヶ平から鎌沼を回るコースに入り、ビジターセンターに到着したのは出発からきっかり4時間後の事でした。

一切経山山頂にて

下山後のお昼御飯は、福島西インターからほど近い「四季茶房　八夢（やむ）」という二百年前の古民家を移築したお店を幹事さんが選んで下さっていました。あまりに立派な店構えに、登山で汗と埃にまみれた一行が入って良いものか躊躇しましたが、ほぼ貸切状態だったので一安心です。

お料理はとても美味しく美しく、「ハイクの会史上で一番」と皆さん絶賛されていました。

その後、お土産に桃を買いこみ、バスは東京へ。帰りの車中では恒例の俳句と川柳の会が開催されました。ただし今回は俳句の先生が不在の為、審査は全員の投票で決められる事に。無記名のはずが、「これは私の句だからね」という大きな声もちらほら聞こえておりましたが、まあそこは土佐高生の良心を信ずることといたしましょう。賞品は去年と同じく陶芸家の井上健郎さん（38回）から素晴らしい作品の数々（去年よりさらに豪華になっていました！）を提供して頂きました。以下、俳句と川柳の入選作です。

俳句

天（一位）
夏空に立ち枯れし木々山模様
中村裕子（37回）

地（二位）
すれ違う鈴の音涼し吾妻山
西内弘（38回）

人（三位）
九十九折れ山塊せまり夏樹海
中村裕子（37回）

四位
風雪に耐えた古木に師の遺影
三浦三紀子（37回）

五位
まほろばに
夢と咲いたりねむの花
幸徳正夫（37回）

川柳

天（一位）
夫婦旅いずこも同じ妻上位
神宮美恵子（44回）

地（二位）
夫婦愛三七三八大ちがい
沢村武彰（38回）

人（三位）
小ピン子も
土佐のペースにまきこまれ
馬田宏（37回）

四位
ダイエット
忘れて食らう肉の味
中村裕子（37回）

五位
登り終え
らくらく登山と後で言う
相良孝子（38回）

もうお気づきでしょう。このレポートの最初に戻って下さい。「三つも取った」の意味をご理解していただけたと思います。中村さん曰く「去年の分も貰うたがよね」いえいえ、それにはきっと来年の分も入っていると思います。

帰りの高速では激しい雷雨に遭いましたが、何故かPAで降りる時だけは雨がやみ、最初から最後までお天気に恵まれた会となったのでした。そしてほぼ予定通り9時過ぎには無事に新宿に到着。来年の再会を約束して散会となりました。

次回の幹事は38回の谷川忠さんに決定です。さて来年はどこの山に登る事になるのでしょうか。そしてハイクの会では、さらに若い同窓生の参加も募集しています。少しでも興味を持たれた方、面白そうと思われた方、百聞は一見にしかず。ぜひ来年は一緒に山に登りましょう。

八夢

向陽新聞

向陽新聞に見る土佐中高の歩み ②
― 中学入試問題漏洩事件と同盟休校 ―

岡林敏眞（32回生）

戦後の焼跡に校舎も完成、大学進学面での実績も向上してきた昭和30年。教職員の気のゆるみから、中学入試問題の漏洩事件が起こる。この事件をキッカケに、生徒は同盟休校に突入。学園の明朗化と発言権強化を要求。新聞部は「自由の気風」のもとに、学校新聞の使命を果たすことになる。（文中敬称省略）

教師が中学入試問題を洩らす

向陽新聞26号（１９５５年５月６日発行）では、『疑惑残る中学入試』『問題解決は困難・・事前に洩れた入試問題』という見出しを掲げ、土佐中の入試問題漏洩事件を特集している。

事件の始まりは中学入試の第１日目の昭和30年（１９５５年）３月26日の朝、一市民から「入試問題が洩れている」という電話が学校にかかってきたことによる。大嶋校長が、「証拠は？」と聞くと、次の日に行われることになっていた口頭試験の問題を二、三あげた。そこで、職員会議を開き、次の日の口頭試験問題を作りかえて試験を行った。そしてこの事件は４月23日の高知新聞に報道された。

この事件に学校はどのような対策を講じたのか。同紙では以下のように報じている。

＊どうして洩れたかについては、校長も「先生の誰かが洩らしたことは、ほとんど決定的」と見ており、職員会でも洩らしたものを追求しているが同僚間のことで問題の解決は難しいようだ。

さらに「先生の自主的解決を望む」と題して、以下の要旨の論陣を展開している。

＊試験問題の作成は校長指示のもと三十名教職員の間でなされ、その印刷まで行われたのであるから、先生の間でも「知らぬ。存ぜぬ」ではすまされなくなり、毎日のように職員会を開いて、対策をねり校長のもとに情報をもちこんで問題を洩らした人の発見に努めているようである。

入試問題漏洩から同盟休校一応の幕引きまでの経過

昭和30年（１９５５年）

【４月23日高知新聞報道】

入試１日目午後から校長を除く全職員が２時間に渡って臨時職員会議を開き、責任者の究明に乗り出した。責任の所在を明らかにする第一段階として、教職員がもちあわせている情報を各人記入の上、校長のもとに提出。必要ならば調査委員会を作ることに。

【６月17日　新聞部が生徒の世論調査実施。結果を向陽新聞27号（１９５５年７月２日発行）に掲載。】

「不満な現在の処置」「辞職要求が圧倒的」と報道。

［大多数の生徒の意見］

問題を洩らしたのが先生であることは、ほとんど決定的で校長もそれを認めている以上速やかにその先生を追求し辞職さすべき。ウヤムヤにもみ消されてしまうことを最も恐れる。未解決では講義など聞く気にならない。この問題の解決なくして真の教育はない

【６月25日　生徒委員会】

向陽新聞報道がきっかけとなり、生徒会が解決に乗り出すことに決定

【６月29日　生徒総会（中高生全員出席）】

「責任者は校長に２時間以内に届け出ることを要求する」ことを圧倒的多数で決定。

＊２時間後、名乗り出る者なし。今後の対策について協議

「休校によって先生方の良心に訴え反省を促そう」と、翌日からの休校を決定。

【６月30日　朝から全生徒講堂に集合。】

＊生徒総会で学校側に再度回答を求めるが、明快な回答なし。委員長が休校宣言。生徒代表を残し解散。

＊講堂で学校側（校長以下全職員）と生徒代表で話合い。

＊学校提案の「先生と生徒とで合同調査委員会を作る」を生徒側は別室で協議。同盟休校を続けても解決困難との意見が出て、３条件付きで休校打ち切りを仮決定。

条件①合同調査委員会は、あくまで責任者を追求。

条件②校内の明朗化。

条件③生徒の発言権強化。

＊話合い再会。学校側、３条件を受け入れる。夜８時近く話合い終了。

【７月１日　生徒総会】

６月30日の代表委員の仮決定を承認。同盟休校はうち切られ問題の解決は合同調査委員会に持ち越された。

【翌日　向陽新聞第27号発行】

『中学入試問題が原因の同盟休校解決す』と題し６月25日の生徒総会から同盟休校終了までの動きを報道。さらに生徒世論調査の結果を詳しく紹介すると共に、「徹底的に責任者を追求せよ。ウヤムヤにするな入試問題」として論陣を張っている。この記事の中で注目すべきは以下のこと。

『生徒の中に「××先生ではないだろうか」という声が多い。入試に限らず、普通の中間、学期試験などの定期試験の問題を教えている先生が決して少なくない。それが誰であるかということも確証を持っている生徒もいる。』

生徒はこの事実に基づいて「学園の明朗化と綱紀粛正」と合同調査委員会の必要性を主張しているのである。

【７月４日　教師と生徒による第１回合同調査委員会】

【７月19日　終業式】

校長挨拶「疑わしい人にはごく近い内にやめてもらう」

【９月１日　始業式】

３先生の退職を発表。

【９月２日】

合同調査委員会が「事件は一応解決した」として解散。

事件の背景に「気のゆるみ」

中学入試問題漏洩事件の背景に「校長・教職員の気のゆるみ」があることは否定できない。焼跡に校舎を建て、講堂も昭和29年（１９５４年）３

月には完成し大学進学校としての評価も定着してきた。

ところが、この頃から少なからずの教師が中間、学期試験など定期試験の問題を一部の生徒に教えているという出来事が起こってくる。試験問題が洩れることは、入試問題漏洩事件の数年前からあったことであり、決して珍しいことではなかったのである。

同盟休校の意義―その1

学園の明朗化

生徒が同盟休校のスローガンに「学園の明朗化」を掲げたのには二つの理由があった。

その一つは、学校側の隠蔽体質である。入試問題漏洩事件があって高知新聞が報道するまでの間に、ほぼ一か月が経っている。入試日の前日には、高知新聞の記者は事件の情報をつかんでいた。にもかかわらず、「近い内に校内で処分するから、報道はそれからにしてくれ」という校長の要請を記者が受け入れた。

高知新聞に報道されるまでの間は、父兄も生徒も事件のことを知らされなかった。校長も教師も事件をひた隠しにして、ひそかに責任者を処分しようとしていたのである。

学園明朗化を掲げた二つ目の理由は、教師と生徒の間の信頼感が大きく揺らいだことである。教師と生徒の間に信頼感がないと、教育はなりたたない。そこで生徒は、事件をウヤムヤにせずに、真相を徹底的に追及して責任者を明らかにすることで学園の雰囲気を明るくすることを学校側に要求したのである。

同盟休校の意義―その2

生徒の発言権の強化

昭和30年頃の生徒会は不活発であった。高校ではホームルームの時間に話し合いに加わらず、自分勝手に教科学習している生徒が多数。

生徒は余計なことをしないで、大学受験勉強に専念していればよいという風潮が学校内に蔓延していたのである。

この風潮が事件発覚後に学校側が生徒に対してとった対応に現れている。校長が全生徒を講堂に集め「事件の解決は学校側に任せ、生徒は社会の風評に耳を傾けずに勉学に励め」と訓辞をしたのである。

これに対して生徒たちは激しく反発した。学校は生徒のための学校である。入試問題が洩れるような学校では生徒の誇りも失われる。定期試験の問題が洩れていたという綱紀のゆるみが事件に繋がっているので、生徒の協力なくして事件の真の解決はあり得ない。学校側は生徒の意見に耳を傾けよ。このように、全生徒が団結して「生徒の発言権の強化」を要求して立ち上がったのが同盟休校であった。

生徒の自主性尊重と

自由な気風のある学校へ

事件から同盟休校までの生徒会の活動をリードしたのは新聞部であった。

新聞部員は事件の発生から同盟休校に至る経過とそれに対する生徒や先輩たち、同窓会の声を取材し、生徒の世論調査を実施したりして、向陽新聞26号と27号で大特集を組み報道している。

こうした新聞部の活躍が元になって生徒会が事件の解決に立ち上がり、学校側も生徒会の要求を入れて事件の解決のために生徒と学校側による合同調査委員会が結成されたのである。

ここで特筆すべきことは、向陽新聞報道に対する学校側の態度の立派さである。新聞部の活動や記事に何らの圧力をかけることなく自由に報道させたのである。同盟休校までは生徒会の活動に教師が圧力をかける風調があったとはいえ、私立学校の利点である「自由の気風」は死んではいなかったのである。

土佐中高に自由の気風が脈打っていることを証明した事件が、同盟休校終焉からまもなくして起こるのである。

大嶋校長への

宅地贈与で大騒動

同盟休校が終焉して4か月も経っていない昭和30年12月、父兄や生徒から大批判を受けることが起こる。「校長土地贈呈」である。

この問題について向陽新聞30号では、一面全部を使い『振興会の在り方に非難』と題する特集を組み、父兄と生徒の反響を報道している。

ことの起こりは、大嶋校長に土地贈呈の資金募集についての趣意書が父兄に回されたことにある。ところが、このことについての一般父兄の会は同盟休校の影響もあって一度も開かれなかったので、一般父兄は趣意書によって初めて寄付のことを知ったわけで、批判の声が挙がった。

同紙で報道されている父兄の声を要約すると以下になる。

「校長に土地を贈ることより前にしなければならないことがある。例えば、図書室の拡大、奨学金制度の設置など」また生徒の大部分は不賛成。

このような批判の声を受けて大嶋校長は「断じて土地をいただくわけにはゆかない」と新聞部員に表明した。

入試問題漏洩事件から同盟休校、さらには校長土地贈呈問題に至る向陽新聞の動きを見ると、批判すべきは批判する、堂々と学校に対して提言をしていくという学校ジャーナリズムの使命を果たしていると言える。向陽新聞はいわゆる御用新聞ではないという創刊以来の伝統が脈々と受け継がれているのである。一連の報道に対して新聞発行の差し止めも起こらなかった。

このことは、土佐中高には生徒の自主性を尊重する自由の気風が息づいていることを証するものであった。自由の気風があってこその土佐中高であり、それがあってこそ、多方面で活躍する人材を育成する学校として存在できることを在校生も卒業生も忘れてはならない。（以下次号）

新「向陽プレスクラブ」設立

藤宗俊一（42回生）

平成22年7月25日、昭和59年の新聞111号を最後に活動を停止している土佐中・高新聞部のOB・OGが市ヶ谷・私学会館に集まり、新『向陽プレスクラブ』の設立総会・懇親会を開催した。「健全な批判こそ母校を活性化する！向陽新聞復活！」と、嘗ての論客たちがその志を誓い合った。当面は、ホームページ（http://www.tosakpc.net/）を中心に、母校への提言、校史の発刊支援、向陽新聞のバックナンバー電子化など積極的に活動していく予定だという。ガンバレ！高齢者！！

第七回ガーナ・日本高校生交流のご報告

公文敏雄（35回生）

日本研修旅行に招いたガーナ高校生と日本の生徒たちとの交流が今夏で七回目を数える。浅井和子元駐ガーナ大使（35回生）の呼びかけで始まった企画がかくも続いているのは、ご支援頂いた各位のご厚意のお蔭であるし、「これからもずっと続けて！」という参加生徒の声が同窓ボランティア仲間の老骨を鞭打ってくれたともいえる。また、閉塞感と内向き志向に蔽われたわが国を思うに「視野の広い青年を育てる」ことが、今ほど求められている時はない。

むかし母校の漢文で習った論語に「憤せざれば啓せず」（発憤なくして啓発なし）とあった。同世代の若者との非日常的な交流をただ楽しむだけでなく、自分に無い違った考えや優れた能力に気づいて「発憤」する。この企画がそんなきっかけを提供できていれば幸いである。

上京した土佐中・高校生から寄せられた感想を、残された紙面でご紹介したい。

踊るハチキンのタマゴ（原宿・表参道にて）

■4泊5日で東京原宿に行ってきた。ちゃんと踊れるかなあ、皆と仲良くやれるかなあと不安だったが、麻布校の人たちもガーナの人たちも皆面白い。最高。絶対来年も行く。（中一KS君）

■ガーナの人たちはとても明るく、僕が言おうとしていることを理解してくれた。JICA東京で同室になったアルベルトやケイケイとは沢山話し、一緒に遊んで良い友達になった。いつかガーナに行ってみたい。（中一TN君）

■英語が苦手で不安だったが「もう一回言って」と頼むとゆっくり話してくれ、ものすごく優しさを感じた。交流を通じて、コミュニケーションの大切さ、ふだん何気なく使っている言葉の大切さ、そして、自分の英語力の無さを痛感した。（中二KIさん）

■去年に続く二回目の体験だったので、積極的に英語で話しかけることができた。相手に伝わった時の嬉しさは今でも忘れられない。東京の他校生とも仲良くなり、沢山刺激をもらった。とても大切な学習になった。（中二TAさん）

■ガーナ大使館でガーナ人と踊ったのが一番の思い出。お蔭で仲良くなり、名前も憶えてもらった。ジェスチュアや単語で通じ合えることも知ったし、こんなに胸が躍ったのは初めて。いつかはガーナに行って交流を深めたい。（中二NTさん）

■今回で二度目の東京行き。香蘭女学校の先輩と「チョコレートデイスコ」を踊ることができたし、ガーナの女生徒にマニキュアを塗ってあげたらお礼にガーナの海で採った玉珠を貰ったし、昨年と違い友達が沢山できた。来年もまた踊りたい。（中二RMさん）

■私にとってこの夏一番の勉強になった。大使館でガーナの食べ物を沢山味わい、JICA地球ひろばのパネル展示や交流でガーナの文化を学んだ。ガーナ人はフレンドリーで一杯話しかけてもらえ、知っている単語を連ねてしゃべれたのが嬉しい。こんな出会いが広がれば戦争もなくなると思った。（中三MYさん）

■去年高知でガーナの生徒と和やかにおしゃべりした体験がきっかけで今年の東京行きとなった。「ダンスで仲良しになれる」日本にもこんな文化があれば、ギスギスした世の中も少し良くなるのでは。英語を頑張って来年も参加したい。将来は学校の先生になって外国の日本人学校などでも働きたい。（中三AMさん）

■迷った末、高校生活最後の機会と思って上京した。初めは黒くて大きくてフレンドリーなガーナ人に戸惑ったが、交流会や同じ宿舎で触れ合ううち、ノリや雰囲気で会話ができ、意思が通じることを知った。来年はもっと沢山の生徒が上京して高知の文化やよさこいをばらまいてくれたら嬉しい。（高二RYさん）

■生徒会最後の大仕事ゆえ、貴重な体験だという期待と、英語力の不安が混ざった。実際は、笑顔で親しく話しかけてくれたお蔭で安心もし、思ったほど苦労せず友達ができた。国や人種が違ってもお互いに理解する努力・姿勢で仲良くできることを実感した。（高二RKさん）

■同じ日本なのに東京の学生との交流では発見があり、高知に居ては得られない体験となった。ガーナ生との交流では、苦手な英語が相手に伝わるか心配だったが、優しく一所懸命理解に努めてくれたおかげで解りあえ、手紙交換までできた。高校時代に貴重な経験ができて幸せ。企画を支えてくれた方々に感謝。機会があればこんな仕事にぜひ携わりたい。（高二YOさん）

働かざるもの食うべからず（高知大農園で稲刈実習）

日程概要は次のとおり。

8月20日　ガーナ高校生一行一八名来日、麻布など都内高校生と交流開始。

26日　土佐中高生十一名合流

29日　日・ガ学生チームで原宿スーパーよさこい祭に出場

30日　ガーナ生来高

9月1日　土佐始業式での歓迎を皮切りに交流開始。高知大農学部での稲刈り実習、ホームステイ、知事・市長表敬、高知ガーナの夕べなど。

6日　離高

ふるさとへの手紙（十五）

奥田　純子（76回生）

「土佐中高」への想い

先日国際線ターミナルが開業し、いつもよりにぎやかな羽田空港。適当にまとめてぼさついた髪を、チケットを持った手で直しながら、もう片方の手は、見た目からは想像できないくらい重い楽譜の詰まったキャリーバックをゴロゴロひき、急ぎ足で高知行きの便に乗り込みホッと一息つく・・・。ここ3年ほど、仕事の関係で毎月東京‐高知を行き来しています。演奏や作曲、採譜、ラジオパーソナリティなどの仕事をしつつ自分自身のアーティスト活動をしています。高知での滞在期間は1週間ほど。スケジュール帳を開いて仕事の確認をする傍ら、帰ったら、今回も土佐高時代の友人たちと飲むぞ・・・と楽しい場面を想像してうきうきふわふわしているのです。

大阪から中1編入した私にとって土佐中は未知の空間そのものでした。すぐに学校に馴染んで友達ができるように、スポーツ系の部活に入ることを望んでいました。当時私と同じクラスで陸上部だったYちゃんに、家庭科室でぼろ布を縫いながら、ぼそっと入部の意を打ち明けました。すると、Yちゃんは大歓迎と言わんばかりに目をきらきらさせて色々早口で説明した後、ぴっと練習場所を指差してくれました。そこは想像していたようなハードルが立ち並ぶ爽やかなグラウンドではなく、ごつごつした山肌にちらほら墓石と思われるものが見られる、あの筆山でした。あまりのイメージのギャップに針と布が手から落ちそうになりました。

筆山練習はとてもきつく毎日血を吐く思いで、周りの人が見るとあり得ないほど醜い顔で走っている時もあったと思います。しかし、先輩や同級生に励まされながら、猫の通るような小道を縫ってやっと頂上まで到達し、麓の高知市街を眺めた瞬間、何とも言えない達成感でいっぱいになりました。雨の日はバーベルを上げたりする筋トレ、年2回の芸西での合宿もあり、ピアノのコンサートを辞退して練習に参加させられたりしました。リレーのために組んだ私とYMCAの間で、繰り返し何度もバトンの受け渡しを練習しました。これらはすべて県体を勝ち抜いて四国大会に行くという共通の目標を目指すためのものでした。高1・高2とその目標を達成し、高3の最後の大会で、順位1つ手が届かず夢破れて泣き崩れました。でも、このとき女子リレーチームの自己ベストを記録し、それと同時に大変充実した私の部活は幕を閉じました。

都内某レコーディングスタジオにて

あれから10年ほど経ちました。やりたいことに向かってがむしゃらに走り続けている今、まだまだこれからだと思っていた矢先、突然、自分のいままでの歩みを振り返る機会を与えてもらいました。少し戸惑いましたが、今回土佐中高の頃を想い巡らすことで、むしろこれからの自分の未来をしっかりと見据えることができて良かったです。屋上で応援団が練習すれば振動で揺れるあの旧校舎で学んだ5年半、笑ったり泣いたり、自分の想い描く夢も、揺れる水彩のように色を変えました。信頼できる多くの友人とすばらしい先生と一緒に過ごした中で私が得たものは、目標に向かって切磋琢磨する強い意志と、それができる自信だと思っています。土佐中高は自分の人生の礎です。

（シンガーソングライター）

母校／同窓会本部／各支部

土佐中学・高等学校　事務局　千頭裕　〒780-8014　高知市塩屋崎町1-1-10
(TEL)088-833-4394 (FAX)088-833-7373 (E-mail)tosa@tosa.ed.jp (HP)http://www.tosa.ed.jp/index.html
土佐中学・高等学校同窓会本部　会計幹事　千頭裕　〒780-8014　高知市塩屋崎町1-1-10
(TEL)088-833-4394 (FAX)088-833-7373 (E-mail)tosa@tosa.ed.jp (HP)http://www.tosaobog.com/
同窓会北海道支部　事務局長　山本隆昭　〒001-0018　札幌市北区北18条西6丁目 ARTE 88-305
(TEL)011-756-2817 (FAX)011-756-2817 (E-mail)yamat@den.hokudai.ac.jp
同窓会東海支部　事務局長　神宮美恵子　〒468-0075　名古屋市天白区御幸山1201 御幸山ﾊﾟｰｸﾏﾝｼｮﾝ B-301
(TEL)052-837-5834 (FAX)ナシ (E-mail)jjingu-m@crux.ocn.ne.jp (HP)http://tosakotokai.web.infoseek.co.jp/
同窓会関西支部　事務局長　原田和人　〒530-6001　大阪市北区天満橋1-8-30 OAPタワー1F アリコジャパン内
(TEL)090-1073-7822 (FAX)ナシ (E-mail)harada73@hotmail.com (HP)http://www.tosa-ko.org/kansai/
同窓会広島支部　事務局長（新）大谷準一　〒734-0007広島県広島市南区皆実町6-3-26-902
(TEL)082-253-5759 (FAX)082-254-7523 (Email)spat56z9@vesta.ocn.ne.jp (HP)http://www.geocities.jp/hiroshimashibu/
同窓会香川支部　事務局長　武山正人（担当：大石浩）〒760-8573　高松市丸の内2番5号 四国電力(株)
(TEL)050-8801-2720 (FAX)ナシ (E-mail)ooishi11737@yonden.co.jp
同窓会関東支部　事務局長　二宮潔　〒100-8222　東京都千代田区丸の内2－6－1　丸の内パークビルディング
森・濱田・松本法律事務所弁護士市川直介気付
(TEL)03-5223-7719 (FAX)03-5223-7619 (E-mail)naosuke.ichikawa@mhmjapan.com (HP)http://www.tosako-kanto.org/

〈大学進学秘話〉

宇田耕一先生の大恩

27回生　岡林幹雄

君は大学へ行きなさい

あれは、いつのことだったのか。高三（昭和26年）の何月の出来事だったのか。大事なことなのに思い出せない。

ある日、私は電車通学の仲間と一緒に下校し、播磨屋橋の停留所で電車を待っていた。後免行きの電車が来たが、停留所ではなく、高知駅方面への進入線路で停まり、車掌が「この中にスリが居るらしいので、警察の調べが終わるまで、誰も乗下車できない」と告げた。仕方なく次の電車を待っていると、級友の一人が息せき切ってやってきた。確か自転車を飛ばして来たように思う。「おい、おんしゃー何ぞ悪いことをしたろう。校長が、急いで探してこいと言いゆうぞ」とのこと。心当たりはないものの、急いで引き返し、学校の隣の大嶋校長宅へ伺った。

玄関で案内を請うと、校長が出てこられ「少し待て」とのこと。暫くすると、宇田耕一先生が出てこられた。学校創立者のご令息ということは存じ上げていたが、先生とお会いするのは初めてで、むろんお話するのも初めてであった。「君が岡林君かね」「はい」「そうか。話は聞いた。君は大学へ行きなさい。僕が生活費も、学費も全部面倒を見るから、心配しないで大学へ行きなさい。合格したら、大阪の淀川製鋼所社長室へ連絡して下さい」とのお話。一瞬訳が分からなかったが、「有難うございます。よろしくお願いします」と言うのが、やっとだった。先生は「ちゃんと合格して下さい。連絡を待っているから」と言われると奥の方に入られた。その後校長から「もう帰ってよい」とのことで退出した。（宇田先生が学校理事長に就任されたのは、昭和27年1月30日だから、それ以前の出来事である）

私の家は、父が陸軍士官学校出身の職業軍人で、フィリッピン派遣（第14方面軍）の野戦補充司令部司令官代理として、昭和20年5月戦死したが、敗戦後の混乱と情報の遅れから、小学校卒業までには戦死の公報が届かず、父の死を知らぬまま、土佐中学（旧制）に入学した。もし母子家庭になっていたことを知っていたら、土佐中に入らず、県立の中学を受験していたかも知れない。戦死の公報が届いたのは、中一の2学期だったと思う。そういう事情だから、母の収入だけでは、都会の大学進学の可能性は非常に乏しかったと言わざるを得ない。（軍人遺族扶助料は、当時進駐軍の命令で停止されていて、復活したのは確か昭和28年頃からであったと思う）。就職する場合のことも考え、選択科目で簿記や珠算もとったが、一方では大学へ進学したいとの思いもあり、他の学友同様受験を前提とした勉強にも取り組んでいた。

生活費・学費を全て支給

そこへ前述の宇田先生のお言葉である。嬉しいと思うと同時に、絶対に浪人は出来ないと覚悟し、一橋大学を受験することに決めた。昭和27年は、どういう訳か一橋の経済学部は志願者が激増し、競争率25・5倍であったが、幸い合格することが出来、淀川製鋼所社長室へ合格した旨連絡したところ、今後のことを話したいから来てくれとのこと。伺うと「東京支社長と経理課長に全て話してあるから、毎月はじめに一ヶ月分の必要額を、生活費・書籍代・通学費というふうに項目別に整理して明細書を出して下さい。君が要るという分は、全て渡すようにと言ってあるので、心配しないように」とのご指示であった。

そこで昭和27年4月入学直後、淀川製鋼所東京支社長に挨拶に伺ったところ「全て経理課長に任せてあるので、今後一々私の処へ挨拶に来る必要はない。直接経理課長の処へ行くように」とのこと。経理課長に、恐る恐る明細書を提出したところ「社長から、君が必要というものは全額渡すようにと言われているので、聞いたりしてはいけないが、君こんなに少なくてやってゆけるの。遠慮せずに必要なものは言うように」とのことで、その後4年間、学年が進むにつれ、原書の購入やゼミの参考書籍代等、金額が嵩むこともあったが、明細書について質問されたことは一度もなかった。

当時、宇田先生は政治活動の個人事務所を、淀川製鋼所東京支社ビルの最上階に開設されていて、5、6人のスタッフが勤務していたが、そこにも毎月お邪魔し、また議員会館の事務所にも時々伺って、近況報告するとともに、政治の動きを垣間見ることが出来た。時には先生の方から呼び出しがあり、伺うと学者や言論界の人を紹介されたり、対談を傍らで聞かされたりしたが、要は見聞を広めよ、とのお気持ちからであったと思う。

大学4年生の夏頃、「淀川製鋼所に来て貰いたい気持ちは山々だが、経営上の問題で、近く労働組合に人員整理を申し入れるつもりであり、社長が縁故の者を入れたとなると、組合がウンと言わない。君は自由に就職を決めて下さい。むろんどこにしろ、僕が身許保証人になるから」とのお話をいただいた。当時就職採用試験は大学4年の10月から解禁であったが、一橋では大学の方針として、最初に採用通知のあった所に行くようにと決められていたので、播磨造船所に入社した。

このように大学4年間、筆舌に尽くせぬ大恩をいただいたが、謝意を表す方法も思いつかぬまま、卒業論文（一橋ではゼミも必修。卒論も必修。私のゼミの指導教官は、当時学長の井藤半弥先生であった）の序章の中で、宇田先生の大恩に対する感謝の言葉を綴ったことが精一杯であった。

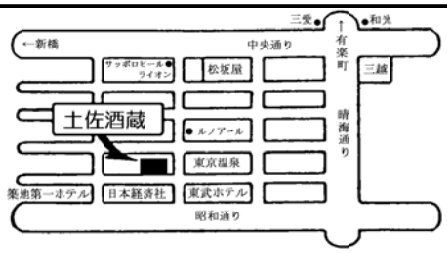
親子で「人を育てる」理念を共有

宇田先生はその後、石橋内閣・岸内閣で、国務大臣・経済企画庁長官兼科学技術庁長官を務められるとともに、その間何度か臨時首相代理としての重責も果たされたが、内閣改造で昭和32年7月10日退任された。実は、退任される前から、腹が痛いと病状を訴えられ、ご家族が病院に行くよう勧めていたが「大臣として公務を疎かには出来ん」とおっしゃって、痛いながらも大臣の職責を全うされていたとのこと。大臣退任後、病院で診て貰った時には、手遅れで腹膜炎が悪化しており、昭和32年12月30日、53歳の若さで逝去された。弔問に伺った際、ご令息耕也氏から「貴君のことは父から聞いていました。病気のことを知ったら、会社を休んでも必ず見舞いに来るだろう。そんなことをさせてはいかん。決して知らせるなと言うので、知らせなかった」と告げられ、ただ悲嘆に暮れるばかりであった。

宇田耕一先生が、面倒を見て下さったのは、ご尊父宇田友四郎氏が私財を投じて、土佐中学を創立された『人を育てる』という理念と、同じお気持ちからではなかったかと思う。

私は昭和35年26歳の時、石川島重工業と播磨造船所の極秘合併交渉に際し、播磨側の合併交渉委員として参加し、合併を実現した。宇田先生がご存命で、このことをご報告したら「そうか。仕事をしたか」と喜んで下さったことであろう。しかし、それも叶わなかった。海外子会社役員として赴任の時や、帰国後本社役員就任の時、その他先生の年回忌の折など、墓前に近況を報告申し上げてきているが、未だに何のご恩返しも出来ず、徒に馬齢を重ねていることは、お恥ずかしい限りである。

先生のお墓は、香南市香我美町岸本の宝憧院にある。



季節のふるさとの味
土佐酒蔵
銀座7－12－4 友野本社ビル B1
電3545-3855 銀座第一ホテル通り

喜寿を迎えて居合道五段の昇段審査に合格

弁護士 秋田清夫（27回生）

今年、私は数え年77歳となり喜寿を迎えた。私は剣道・居合道ともに、財団法人全日本剣道連盟（全剣連）の各四段であったが、本年9月11日東京都足立区綾瀬の東京武道館で開催された同剣連傘下の財団法人東京都剣道連盟（都剣連）主催の居合道昇段審査に合格して五段となることができた。

この日午前9時半ころから午後5時半近くにかけて、初段から五段までの昇段審査があり、五段審査は午後4時半過ぎからあったが、40人受審して11人の合格で、合格率は27パーセント、その合格者の中に入れたのは誠に幸運であった。合格者の最年長者は82歳、最年少者は45歳、私は2番目の年長者であった。

剣道を始めたのは、京大法学部に入学した昭和27年、前年締結されたサンフランシスコ講和条約の発効により日本は独立を回復、敗戦で禁止されていた学生剣道が復活して、京大の剣道部が再建されたその年からであった。昭和31年卒業して直ちに司法修習生となったが、その年、弘道館剣道の審査を受けて、三段を授与された（全剣連は昭和27年の結成であったが、まだ剣道形も含めて十分整備されていなかった）。その後2年間の司法修習を経て検事に任官したが、忙しいこともあり、剣道の練習は碌にできなかった。平成3年4月広島地検検事正として広島に赴任したとき、同地に本社があるマツダの重役になっていた京大剣道部の1年後輩の浅野敬司君（土佐中・高28回生の剣友大西正一郎君と同学年、故人）から誘われて居合道を始めた。

居合道は、やったり休んだりしながらも続け、平成6年4月名古屋地検検事正を最後に退官した後は剣道も再び始めた。居合道は、平成9年8月一級審査に、同年11月初段審査に合格し、その後二段、三段と昇段し、平成12年11月四段審査に合格した（四段審査には1度落第した。この落第は、私にとっては生まれて初めての落第であった）。

剣道は、弘道館三段だったから全剣連の認定を受けて四段審査を受けることも可能であったが、一級から受け直すこととし、平成6年11月一級審査に、翌年3月初段審査に合格し、その後二段、三段と昇段し、平成13年9月四段審査に合格した。剣道は、試合時は勿論、審査の時も2人1組という形で激しくぶつかかり合うものであるため、老齢になると、身体に厳しいということもあり、以後昇段審査をめざしての練習は控え、居合道のみの昇段を目指すこととした。業務が時々多忙になることもあって、集中できないこともあり、四段審査合格後、9年があっという間に経ってしまったが、今回一発で五段審査に合格できたことは望外の歓びであった。

審査や試験は、何歳になっても嫌なものである。何事も、「基本に忠実に」、これを疎かにせず、こつこつと諦めずに継続してやることだと、つくづく思う。

編集後記

◇スーパーで買物中に目に飛び込んできた土佐弁、「こじゃんと旨い!! 夢甘栗」

袋の中の能書きには、牧野富太郎博士が「佐川町民報」で「地元で著名なこの栗を繁殖させ東京等に出荷すれば、町の富を増やす一助になる」と言及したとある。現在この栗はなく、博士の愛弟子の栗研究家が尽力し、仁淀川流域で栽培、少量を都心に出荷とか。まっことうまいぞね！栗の王様やちや。（酒呑童女）

★出版レーダー★

鍋島高明（30回生）
「語り継がれる名相場師たち」
８４０円　日本経済新聞出版社　2010.08

塩田潮（40回生）
「民主党政権の真実」　１６８０円　毎日新聞社　2010.11

西村繁男（40回生）
「もうすぐおしょうがつ」　８４０円　福音館書店　2010.11
「おばけでんしゃすごろく」１０５０円　童心社　2010.09
「おでんさむらい　ひやしおでんのまき」
１１５５円　くもん出版　2010.06

黒鉄ヒロシ（41回生）
「ぱんぷくりん」
５８０円　ＰＨＰ研究所　2010.10

杉山雄一（41回生）
「創薬技術の革新」
５６００円　メディカルドゥ　2010.10

高山宏（42回生）
「春画」
１１０３円　講談社　2010.07

宮岡等（49回生）
「子どもの発達と行動（脳とこころのプライマリケア）」
３１２９０円　シナジー　2010.10

坂東眞砂子（51回生）
「やっちゃれ、やっちゃれ！」１７３０円　文藝春秋　2010.07

門脇護（53回生）（ペンネーム　門田隆将）
「なぜ君は絶望と闘えたのか」　５４０円　新潮社　2010.09
「風にそよぐ墓標」　１６８０円　集英社　2010.08
「あの一瞬」　１５７５円　新潮社　2010.07

英保未来（54回生）（ペンネーム　大森望）
「きょうも上天気　ＳＦ短編傑作選」
６６０円　角川書店　2010.11
「逃げゆく物語の話」　１０５０円　東京創元社　2010.10
「ぼくの、マシン」　１０５０円　東京創元社　2010.10
「ここがウィネトカなら、きみはジュディ」
９８７円　早川書房　2010.09
「ＮＯＶＡ　２」
９９８円　河出書房新社　2010.07
「量子回廊」　１３６５円　東京創元社　2010.07

川村昌嗣（54回生）
「医師がすすめる50歳からの肉体改造」
８８０円　幻冬舎ルネッサンス　2010.06

森岡浩（55回生）
「読んだら話したくなる　名字でたどる日本の名家」
１４７０円　日本実業出版社　2010.08

廣瀬裕子（60回生）（ペンネーム　高遠裕子）
「経営は『実行』〔改訂新版〕」
１７８５円　日本経済新聞出版社　2010.10

ここからは雑誌に掲載されています

尾池和夫（34回生）
「季語のこころ」　こころの未来　4　[2010]

柿田睦夫（38回生）
「暮らしの焦点　霊感商法刑事摘発、追いつめられる統一協会」
前衛　（通号 862）[2010. 10]

塩田潮（40回生）
「小沢一郎が待つ政争第二幕（特集　ファストフード化する政治）」
中央公論　125(11)（通号 1519）[2010. 11]
「首相がその座を降りるとき(第２回)ワンチャンスをモノにした強運と並外れた権力欲　菅直人が生の姿を見せるとき」
ニューリーダー　23(10)（通号 276）[2010. 10]
「FOCUS政治　「ないない尽くし」の首相、政権維持の条件とは」
週刊東洋経済　(6284)　[2010. 10. 2]
「首相がその座を降りるとき(新連載・第１回)制度上任期なき首班　「退き際」に表れる政治指導者の本質」
ニューリーダー　23(9)（通号 275）[2010. 9]
「FOCUS政治　民主党「秋の陣」はゴールなき長期レース」
週刊東洋経済　(6279)　[2010. 8. 28]
「緊急インタビュー　渡辺喜美・みんなの党代表　なぜ民主党は天下りを許すのか　公務員制度改革が必要な理由」
ニューリーダー　23(7)（通号 273）[2010. 7]
「FOCUS政治　変わり身の早い菅首相　「財務省派」を脱するか」
週刊東洋経済　(6272)　[2010. 7. 17]
「緊急インタビュー　大塚耕平・内閣府副大臣　政治は確実に変わりつつある　日本のビジネスモデルを変える」
ニューリーダー　23(6)（通号 272）[2010. 6]
「FOCUS政治　新首相は「小鳩」体制の限界と矛盾を克服できるか」
週刊東洋経済　(6286)　[2010. 6. 12]
「政治　国民の期待は「根こそぎ改革」--危険性はらむ民主党の財政政策」
改革者　51(6)（通号 599）[2010. 6]

黒鉄ヒロシ（41回生）
「特別対談　坂本龍馬、岩崎弥太郎から吉田茂まで　「土佐の血」とは何か」
週刊現代　52(28)（通号 2579）[2010. 7. 31]

杉山雄一（41回生）
「編集長VISITING(321)数理モデルで生命体を再現　創薬の確実性高めるMD試験--東京大学大学院薬学系研究科分子薬物動態学教室教授　杉山雄一氏」
医薬ジャーナル　46(8)（通号 560）[2010. 8]

宮岡等（49回生）
「精神科医は診療録に何を記載するか（臨床を書く）」
こころの科学　（通号 153）[2010. 9]
「産業保健国内関連ニュース　第25回日本ストレス学会学術総会(第27回日本青年期精神療法学会総会合同大会)」
産業医学ジャーナル　33(4)（通号 191）[2010. 7]
「治療に疑問を感じたら」こころの科学　（通号 152）[2010. 7]
「患者・家族のみなさんへ　主治医以外の意見を求めたほうがよいとき（治療に疑問を感じたら）」
こころの科学　（通号 152）[2010. 7]

坂東眞砂子（51回生）
「世界で一番幸せな島(Vanuatu)に家を建てる(2)たった三日間で、家の設計図ができてしまった」
婦人公論　95(18)（通号 1305）[2010. 9. 7]
「世界で一番幸せな島(Vanuatu)に家を建てる(最終回)八ヵ月後には暮らしはじめていた」
婦人公論　95(19)（通号 1306）[2010. 9. 22]
「世界で一番幸せな島(Vanuatu)に家を建てる(1)必死でしがみついた希望の先に開けた、南国での暮らし」
婦人公論　95(17)（通号 1304）[2010. 8. 22]

門脇護（53回生）（ペンネーム　門田隆将）
「九十歳の兵士たち(2)玉砕」　文芸春秋　88(13)　[2010. 11]
「光市母子殺害　拘置所で聞いた元少年の肉声（大型特集　真相未解決事件35）」
文芸春秋　88(12)　[2010. 10]
「九十歳の兵士たち(1)特攻」　文芸春秋　88(12)　[2010. 10]
「この著者に会いたい！『この命、義に捧ぐ』門田隆将(ノンフィクション作家)ノンフィクションの主役は『出来事』です」
Voice（通号 394）[2010. 10]
「父と子の日航機墜落事故（御巣鷹山から25年）」
週刊朝日　115(36)（通号 5022）[2010. 8. 20]

英保未来（54回生）（ペンネーム　大森望）
「大森望の新ＳＦ観光局(第16回)海外時間ＳＦ短篇総まくり」
ＳＦマガジン　51(11)（通号 656）[2010. 11]
「《ＳＦマガジン創刊50周年記念アンソロジー》刊行記念座談会　テーマ・アンソロジーを編む楽しみ」
ＳＦマガジン　51(9)（通号 654）[2010. 9]
「対談　大森望×佐藤誠一郎　ミステリ熱、再び。」
波　44(9)（通号 489）[2010. 9]
「大森望の新ＳＦ観光局(第15回)アンソロジー、アンソロジー！」
ＳＦマガジン　51(8)（通号 653）[2010. 8]
「大森望の新ＳＦ観光局(第14回)ＳＦセミナー今昔物語」
ＳＦマガジン　51(7)（通号 652）[2010. 7]
「大森望の新ＳＦ観光局(第13回)鏡明の生活と意見」
ＳＦマガジン　51(6)（通号 651）[2010. 6]